

道は常にして名無し。樸は小なりと雖も、天下能く臣とするもの
莫し。候王若し能く之を守らば、万物將に自ら賓せんとす。
天地相合して、以て甘露を降す。民之に令すること莫くして而も
自から均し。始めて制して名有り。名も亦既に有り。夫れ亦將に
止まることを知らんとす。止まることを知るは殆うからざる所以なり。
譬えば道の天下に在ること、猶川谷の江海に於けるがごとし。

【大体の意味内容】宇宙普遍の原理である「道」は、実は日常卑近の中にあまねく存在している
るので、ことさらな名はない。空気のようなものだ。たとえば切り出したままの樸は小さなもの
にすぎないが、そのままではだれも道具として使いこなせない。(それと同様で素朴なものほど、
誰も支配コントロールすることができない)。統治者たる王侯がこの道理をわきまえ、素朴
なものをそのあるがままで尊重すれば、かえってすべての者は自ら進んで、服従してくる。
天と地が和合して、恵みの甘露を降らせよう。人民は、ことさら命令しなくても、自ずからひと
つに均しく結ばれてゆく。名のない素朴なものを制り分けて、実用の道具にしてしまうこと
で、「名」がつくようになるのだ、「箸」とか「机」とか。そうして名づけられたものがあると、
万物を支配するため、際限なく物事への名づけが行われる。人間の生業や身分、価値観、流行、
あらゆるものに名が与えられる。そうすると人々はその中のどこかに位置付けられたり、その
中の何かを追い求めるように仕向けられたりして、身も心も支配コントロールされてしまう
のだ。だからそのように、名のあるものを追い求めるような思考を停止する術を知るべきであ
る。世間の流行に体は流されても、心は自分の意志でとどめることができれば、危険を察知

